# 近世後期海村の結婚・離死別・再婚
## ―肥前国野母村を事例として―

京都大学大学院　文学研究科
中島　満大

本報告では、肥前国西彼杵郡野母村（現在の長崎県長崎市野母町[のもまち]）に残る『野母村絵踏帳』を史料として用いて、東北や中央日本に比べて研究蓄積が進んでいない西日本村落、加えて農村や都市に比して取り上げられることの少ない海村における結婚・離死別・再婚のパターンについて検討する。歴史人口学は、徳川社会における人口・家族の地域性を指摘しており、その議論を展開していくためにも、野母村を研究することには意義があると言える。

野母村の結婚については、先行研究によって、平均初婚年齢が高いこと、そして平均初婚年齢よりも第１子出産年齢が低いことが報告されている（Tsuya 2001）。しかし、先行研究では分析対象を女子に限定しているため、本報告は、男子が第１子をもつ年齢と結婚との関係性について述べる。また結婚より前に出産を経験した女子のうち、その後、どの程度が結婚に至っているかを示す。また男子の場合でも、結婚より前に子どもをもった者が、その後、結婚するのかしないのかについても報告する。

次に野母村では、結婚に比べて離婚や死別についてはあまり分析が進んでおらず、まず基本的な統計を示す。特に野母村ではその生業が漁業であることから、他の村落とは異なる死亡のパターンがみられる。それにより、海村では、男子が漁業で命を落とすことが多く、それが死別へとつながることも多い。本報告では、今まであまり触れられてこなかった死別に焦点をあてる。

最後に結婚、そして離死別を経た後に再婚がどのように行われているかについて記述する。再婚への経路は、歴史人口学でも幾つかの研究（例えば、Saito and Hamano 2006）を除いてあまり検討されておらず、今回は野母村の再婚のパターンを検討していく。今回の報告では、結婚、離死別、そして再婚をそれぞれの関連性を示しながら、野母村の結婚システムがどのように可動しているのかを明らかにしていく。